

日蓮聖人の法華經受容について

塩 田 宝 裕

一、はじめに

日蓮聖人の宗教を考える上で、最も根本にある聖典は何であるかと問うとき、法華經がある。そして、日蓮聖人はその教えに帰依され、末法の救いの教えであるとされた。つまり、聖人にとって法華經は、「法華經＝明鏡」といわれるように全ての行為の規範であり、我々にとつての絶対的權威性を有するものであるといえよう。

このように、聖人は法華經を諸經よりも上位において、自らを法華經の行者であるとされ、法華經の宣布に心身を注がれた。

ところで、既に平安時代には法華信仰が行なわれていたことは周知の事実である。それでは、聖人の法華經信仰は平安時代からの継承なのか、独自の信仰なのであるかという問題が提起される。

平安時代の法華信仰を端的に表現した言葉に「朝題目、夕念仏」がある。これは、朝に法華經の読誦、夕方に念仏を唱える信仰形態である。すなわち、法華經と阿彌陀仏の同時信仰であり、当時の信仰の雑行性を指摘できる。一方、聖人は、法華最勝の立場から四箇格言を主張され、末法に残された教えは法華一乘、題目のみであり、成仏への直道であると説かれているのである。すなわち、純粋な法華經信仰である。

このように、平安時代にも法華信仰は存在していたが、諸經への信仰と並存した形態であり、聖人の法華經のみの専修信仰とは大きな相違があると推測できる。

そこで、この小論では、平安時代の法華信仰を説話から検証するとともに、聖人の法華經觀との相違を明確にしたい。

二、『法華驗記』にみる法華信仰

平安時代の僧俗が法華経をいかに捉えていたのか、という問題を考えるうえで、ここでは説話に注目しながら考察を進めてみたい。

ところで、一般に説話とは、人々に様々な教訓を与える物語で、その当時の民衆の持っていた意見、嗜好、信仰などが端的に述べられている。また、仏教説話には、僧俗からみた仏教、特に靈驗譚、因縁譚、輪廻思想を看取でき、当時の仏教信仰を知る場合の手助けとなる。ここでは、様々な仏教説話の中から、最も法華信仰の立場が表出している『法華驗記』を中心に平安時代の法華信仰を考察したい。

『法華驗記』（『大日本法華経験記』）は、鎮源により長久年間（一〇四〇～一〇四四）に成立したと考えられている（1）。これに収められている説話は全て法華経の持経者の話である。初めに法華経の持経者の先蹤として、一話から四話で聖徳太子、行基、伝教、慈覚をあげている。五話から九七話までが法師伝、九八話から一〇〇話までが比丘尼伝、一〇一話から一一六話までが白衣伝、一一七話から一二四話までが女人伝、一二五話から一二

九話までが人間以外の動物、変化、道祖神など異類伝が収められている（2）。このように『法華驗記』は、僧、俗、女人、異類等広い範囲にわたって法華経が信仰されていたことが理解できる。

それでは、なぜこのように広い範囲で法華経が信仰されていたのであろうか。この問題を考えるうえで『法華驗記』にみられる信仰形態から検証したい。

『法華驗記』にみられる信仰形態の特徴に雑行性があげられる。これは、法華経を修することに加えて、真言、念仏、禅等も同時に修する形態である。特に、念仏または真言と法華経という組合せは三〇例（二三・五％）程みられる。その顕著な例として「第五二話 仁慶法師」⁽³⁾では、幼い頃、比叡山で受戒して法華経を誦誦、後に真言を習い、死が近づいてから、両界曼荼羅を図絵し、阿弥陀仏像を造像、法華経書写をした。そして遷化の時に往生迎接の相があらわれ、西方に向かったと語られている。この他に、法華経、念仏、真言の三つを修する説話は四例（三・一％）を数える。また、法華経、真言、禅は二例（一・六％）、法華経、念仏、禅は一例（〇・八％）、法華経、念仏は一四例（一〇・九％）、法華経、真言は一〇例（七・八％）、法華経、禅は三例（二・三％）、法華経、

戒は二例（一・六％）である。

このように、『法華驗記』において法華經と他の信仰の結びついた雑行性が指摘できる。

では、『法華驗記』ではいかなる仏を本尊と捉えて雑行的信仰を修していたのであろうか。この問題を考えるうえで、まず法華經の持経者がいかなる浄土觀をいだいていたかを考察したい。

橋川正氏は『法華驗記』にいかなる浄土を期したのかを次のように数量的に分類されている。

『法華經』を受持しながらその所期の浄土が確実に西方弥陀の極樂世界とせらるるもの合して三六例を得る。しかししてまた前後記事の上から西方信仰と想定し得るもの一三例を数えることができるのである。（中略）そのほか弥勒の浄土に上生せんと願つたもの一三例、切利天に生れたいと願つたもの四例を見る（以下略）（4）

橋川氏の分類では、西方極樂浄土を願っているものは四九例（三八・三％）、兜卒天は一三例（一〇・二％）、切利天は四例（三・一％）であると述べられている。四割近くが西方浄土を願う信仰であることが理解できる。このことから、阿弥陀仏への崇拜が最も多いのではないかと

推測できる。

たとえば「第五一 楞嚴院の境妙法師」では、

身体を沐浴して、淨き衣裳を着て、五色の糸をもて弥陀仏の手に着けて、その糸をもて我が手に把り西方に向ひて坐せり。諸の僧侶を請じて、法花を転読し、法華懺法を修して弥陀念仏を勤め、即ち遷化せり（5）。

この記述から明らかのように、法華經読誦と念仏を修しているも、本尊、崇拜対象は阿弥陀仏である。このように、最も数の多い死後の西方極樂浄土を期する信仰形態は明らかに本尊を阿弥陀仏と規定しているものと推察できる。また、觀音、地藏菩薩が、阿弥陀五尊であるのでこれも含めればさらに数量的には阿弥陀信仰は多くなる。

一方、数量的には少ないが、釈尊及び釈迦三尊である普賢、文殊菩薩を崇拜していたと考えられる説話に「第四六 叡山安樂院の叡桓上人」がある。これには、雑行性がみられず、「釈迦の放光を拜み、普賢の摩頂に預る。」（6）とあり、法華經を誦して生死を離れたとしめくられている。しかし、このように明確に釈尊を崇拜したという記述はまれである。

また、釈迦、多宝二仏が記されている説話も二例のみある。一つは「第九 奈智山の応照法師」(7)もう一つは「第四三 叡山西塔具足坊の実因大僧都」(8)である。前者は、焼身供養の話であるが、二仏のみへの供養ではない。すなわち、背を東方の薄迦梵仏、前を西方の正遍知、胸を釈尊、両脇を多宝仏、咽喉を阿弥陀仏、五藏は五智如来、六腑を六道の衆生へと施したとある。後者は、二仏は記されるものの西方往生が表出している。

夢みらく、七宝の塔あり。釈迦、多宝並び坐して、光を放つとみたり。弥信力を生じて、法華経を誦せり。空に妙なる声ありて言はく、汝観心もて法華を誦せし力に依りて、二如来の光を放つこと昭曜たるを見たり。西方の臨終迎接を疑はざれといへり。夢覚めて涙衣服を湿す。乃至最後に、法華の提婆品を誦して、一心に札を作し印を結びて、西に向ひて即世せり(9)。

以上のように、『法華験記』は法華経を持経とするものの説話であるが、純粹に法華経の信仰のみによる持経者であるとはいえない。つまり、法華経の持経者の念仏、真言等との雑行性が指摘できる。これは、崇拜する仏、本尊が一仏であるとは限定されず、最も多い形が法

華経信仰者であると同時に阿弥陀仏を崇拜するという形態である。

三、日蓮聖人の法華経受容

先の考察から、平安時代の法華信仰の特徴は、諸経との雑行性にあることが指摘できる。また、教主を阿弥陀仏と規定し、西方往生を願うという形態であったことが検証された。換言すれば、現世の滅罪をし、西方往生を期すために修行されたのが法華経であることが推測できる。

それでは、自ら法華経の行者であると規定された聖人は、法華経をいかに受容されたのであろうか。

平安時代の一般的信仰、すなわち、後世西方浄土をかなえるために法華経を修する形態は、明らかに浄土思想が法華信仰を包含した立場に立っていることが指摘できる。そこで、聖人は諸経と法華経の関係をいかに捉えられたのか、という問題を考えねばならない。

聖人は、法華経至上を表明されたのであるから、法華経が諸経を包含するという立場をとられたと推測できる。ここでは、聖人遺文からこの問題を検証したい。

まず、正元元年の『守護国家論』では、「此経不似_二

諸經文字ニ雖レ誦ニ二字ニ含ニ八万法藏文字ニ納ニ一切諸
仏功德也。(一一一頁)『法華題目抄』では「此經の一
字の中に十方法界の一切經を納たり。(三九六頁)」と述
べられている。これらから、聖人は法華經を諸經及び諸
仏の功德を包含した經典であるという立場に立たれたこ
とは明白である。これは、聖人が法華經のみによる衆生
救済を打ち立てられていく過程において、この立場を明
確にする必要があったからである。

それでは、聖人はなぜ法華經が諸經及び諸仏の功德を
包含すると考えられたのであろうか。以下では、諸仏と
法華經及び久遠本仏釈尊との關係を考察したい。

文永九年に著された『祈禱抄』では、

一切菩薩並に凡夫は仏にならんがために、四十余年
の經經を無量劫が間行ぜしかども、仏に成る事なか
りき。而を法華經を行じて仏と成て今十方世界にお
はします。(六六九頁)

と述べられている。すなわち、十方世界の諸仏も法華經
によって初めて仏となったのであって爾前の諸經による
成仏でないことが断言されている。したがって、法華經
が久遠本仏釈尊の教説であるので、十方諸仏は釈尊の眷
属、弟子であると考えられる。これは、文永三年の『法

華題目抄』(三九四頁)、『開目抄』(五七六頁)、『聖密房
御書』(八二四頁)等にみられる。ここで『開目抄』の
文をあげると、

今爾前迹門にして十方を浄土とがうして、此土を穢
土ととかれしを打かへして、此土は本土となり、十
方浄土は垂迹の穢土となる。仏久遠の仏なれば迹化
他方の大菩薩も教主釈尊の御弟子なり。(五七六頁)
と久遠本仏釈尊が爾前迹門の諸仏の頂上にあることが述
べられている。

このように、聖人は諸仏が久遠本仏釈尊の眷属である
と捉えられており、法華經が諸經を包含するという法華
經至上主義に立たれたと考えられる。したがって、諸經
と法華經を融合させる信仰の不要なることが『千日尼御
返事』に

此等の經文(爾前經)は見ずきかず候へども、但法
華經の一字一句よみ候へば、彼々の經々を一字もそ
とさずよむにて候なるぞ。(二七五九頁)

と述べられている。また、文応元年の『唱法華題目抄』
(二〇三頁)には、法華經の題目が能開、爾前經の題目
は所開であると明示されている。

以上のことから、法華經が諸經及び諸仏の功德を包含

するとという見方は『守護国家論』に、また、諸仏が久遠本仏釈尊の眷属であることは『開目抄』により検証された。それでは、法華経と久遠本仏釈尊との関係を聖人はいかに考えられていたのであろうか。

まず、法華経では法師品に「若復有人 受持読誦解説書写妙法華経及至一偈 於此経卷敬祝如仏」⁽¹⁰⁾とある。この文は法華経またはその一偈も仏の如くに敬いみるべきことを説いている。また、経巻のあるところに宝塔を建てて法華経を安置すれば、如来の全身が塔中にまします⁽¹¹⁾、とも説かれている。すなわち、この経説では法華経と仏が同一視されている。ところが、これが迹門の法師品であって仏が何を指すかは明確ではない。

では、聖人はいかに法華経と久遠本仏釈尊の関係を考えられたのであろうか。この問題に関して北川前肇先生は本尊論の立場から考察を加えられている。先生は『日蓮教学研究』⁽¹²⁾の中で、聖人が『祈禱抄』^(六七〇頁)『本尊問答抄』^(一五七三〜七五頁)では法は能生、仏は所生で能生の法は法華経と題目という法を本尊と定められている立場と、『観心本尊抄』^(七一二〜一三頁)『報恩抄』^(一二四八頁)の教主釈尊という仏を本尊とする立場に矛盾がないことを次のように論じられている。

まず、所生の仏の仏格については「十方の諸仏、釈迦牟尼仏、大日如来等であって、本門寿量品の仏、本門の教主釈尊ではないことに留意しなければならない。」⁽¹³⁾と述べられている。すなわち、所生の仏は爾前の諸仏、迹門の釈尊であると規定されている。また、能生の法華経については、「諸仏を生み出す一念三千の仏種がこの経にのみ具していることをいうのであって、それは「寿量品の仏」の内証、妙法蓮華経の五字を指すものと思われる。」⁽¹⁴⁾と述べられている。つまり、能生の法華経を久遠本仏の内証せる妙法五字であると規定できる。したがって、『観心本尊抄』『報恩抄』の仏本尊と、『本尊問答抄』の法本尊には何等異なりがないことが指摘されている。

この論に基づけば、聖人は法華経と久遠本仏釈尊を同一視する立場をとられたと考えられる。

また、文永九年の『四条金吾殿御返事』では、「釈迦仏と法華経の文字とはかはれども、心は一也。(六六六頁)」と述べられていることから法仏一如の立場であることが看取できる。

以上のように、日蓮聖人の法華経が諸経及び諸仏の功德を包含する経典であるという立場、「法華経は久遠本

仏釈尊」であるという二つの見方を検証した。これによって、聖人は爾前の諸経を修するよりも、法華経一経で衆生が救済されることを明らかにされた。

四、おわりに

以上、日蓮聖人の法華経受容及び平安時代の法華信仰との相違を考察してきた。

平安時代の法華信仰の特徴とは「朝法華、夕念仏」にみられるように読誦の法華経、救済主阿弥陀仏・後世西方往生を中心とした雑行形態であった。これは、様々な経典を信仰することで諸仏の功德を得ようとする信仰形態であるといえる。したがって、法華経を持経としながら、念仏、真言等の仏、菩薩を崇拜し、質より量を選択するという雑行性、また、現世の否定という方向に傾いていたとみられる。

ところが、日蓮聖人は法華経と諸経を混えない法華経至上の立場をとられた。これは、諸仏は法華経を行じて初めて仏となったことを根拠とされている。このことから、諸経、諸仏は法華経の眷属であって、その功德をも法華経に包含されると確信された。したがって、聖人は法華経一経の信仰によって成仏ができ、さらに、諸経の

修行の意味なきことを明言された。また、聖人が「法華経」久遠本仏釈尊」という法仏一如の見方をされ、諸経、諸仏の頂点におかれたことを確認できた。

このように、平安時代の「朝法華、夕念仏」に代表される法華経と諸経の雑行形態と、日蓮聖人の法華経受容の相違を検証してきた。

今後は、平安時代の法華信仰における本尊観を検証するとともに、法と仏の関係を明確にすることで、聖人の法華経受容が平安時代の法華仏教からの継承なのか、独自性なのかを考察していきたい。

註

文中引用の日蓮聖人の遺文は、すべて昭和定本『日蓮聖人遺文』に拠り(一)内にその頁数を記した。

(1) 『日本仏教典籍大事典』四二三頁

(2) 川添昭二稿「法華験記」とその周辺」(『仏教史学』八卷三号所収)

(3) 井上光貞 大曾根章介校注『往生伝 法華験記』(『日本思想大系』第七卷)一一九―一二〇頁

(4) 橋川正稿「平安時代における法華信仰と弥陀信仰——とくに『法華験記』と往生伝の研究を中心として——」(伊藤唯真編『阿弥陀信仰』所収)

(5) 前掲『往生伝 法華験記』一一九頁

- (6) 同右 一一二頁
- (7) 同右 六四、六五頁
- (8) 同右 一〇六、一〇七頁
- (9) 同右 一〇七頁
- (10) 『大正藏經』第九卷三〇頁C
- (11) 同右 第九卷三一頁b | c
- (12) 北川前肇著『日蓮教学研究』第一篇第一章第一節第三項
「法と仏」三二、三八頁
- (13) 同右 三六頁
- (14) 同右 同頁